

東日本大震災に想う

おも

「私」と「公」の焦点

児童文学者、石井桃子さんの代表作に「ノンちゃん雲に乗る」があります。この中に、子どもが好きで好きでたまらない白いひげのおじいさんが出てきます。いつも雲に乗っているこのおじいさんが、潮に流されておぼれかけている親子を見つけ、雲ごと海面に急降下し、熊手くまでで親子を流れの穏やかな所に引き寄せ助ける場面があります。

東日本大震災では、多くの幼い子どもたちの命も奪われました。白いひげのおじいさんに助けを求める子どもの姿が浮かび、胸が痛みます。

さて、デンマークの心理学者ルビンの有名な絵に「ルビンの壺つぼ」があります。白黒だけの簡単な絵は、白い部分をじつと見つめると優勝カップのように見え、黒い部分に注目すると向き合う2人の横顔に見えます。焦点をどこに合わせるかで、見えるものが異なる不思議な絵です。また、サンテグジュペリの「星の王



『ルビンの壺』のイメージ

子さま」では、キツネが王子に「肝心なことは目に見えないんだよ」と教えてくれます。私たちは、見たくないものから目を背けようとする性向があり、自分に都合の悪い真実ほど見たくないものです。共同体意識がなくなりつつあります。さまざまな場面です。「私（たち）さえ良ければいい」という自己中心主義が目立つ昨今です。

「このゴミは収集できません！分別がされていません」張り紙をされたごみ袋が、もう2週間も収集場に置かれたままになっています。「私」と「公」、焦点をどこに合わせたらいいのでしょうか。

指宿市長 豊留悦男